

【論文】

『悪霊』論－「心の広さ」をめぐる

秦 野 一 宏

1.

自分は道徳的に壊れている、自分には道徳的ストッパーがない。治療してほしいと、母と妹を惨殺した19才の日本のある若者は語った。若者の言うような道徳的ストッパーのようなものの欠落はしかしながら、医学で修復できる病の範疇におさまる問題だろうか。そもそも道徳的ストッパーがないなどというたいへんな事態は、何が原因で、またいったいどのようにして生じるのだろうか。

ドストエフスキも、善悪を区別する感情すら喪失してしまうこのような道徳心の欠落の問題に、大きな関心をもっていた。『悪霊』の創作ノートでは、主人公スタヴローギンの性格的特徴として「すぐれた知性」、「抑えがたい激情」と並んで、「こわれた本性」が挙げられている¹⁾。「知性の破損、だが心の破損ではない」。これは『作家の日記』草稿にある言葉だが、このすぐあとには、『悪霊』の登場人物に関わる次のような断片的なメモ書きが続く。「キリーロフたち、神人、人神、無為ゆえの無教養²⁾」と。

このメモ書きに絡め、カリヤーキン自身は自身のドストエフスキ論の中で、キリーロフと仲良く遊んでいる幼い女の子が、スタヴローギンが来るととたんに泣き出すことに触れ、心が破損していないキリーロフと心が破損してしまったスタヴローギンをシンボリックに対比している³⁾。邪気のない子どもは、表面に捕らわれる大人たちには感じとれない心のありようを敏感に感じとることができる。刑務所から出所したあと、町の誰ともうちとけることなく孤独に暮らし、死んだ時もまったく誰の同情も引くことのなかったゴリャンチコフ（『死の家の記録』）にも、たった一人、彼の死を悼んで泣く少女がいた。そういえば、幻想の中で生き、子どものような心を

もつびっこの女マリヤ・レビヤートキナもまた、訪ねてきた自身の夫スタヴローギンをじっと見つめていたかと思うと、「ものにおびえた子どもそっくり」、ふいにわっと泣き出した。そしてそのあとには、顔かたちは似ているが、本物とは違う虫唾の走るような「僭称者」だとして彼を部屋から追い出した。スタヴローギンからは「ユロージヴァヤ（白痴行者）」だとなじられたマリヤだが、そんな彼女もシャートフとは親しく、うちとけて話せる。マリヤみたいな子どものような女性と深く関わることのできるシャートフもきっと、心の破損していないキリーロフたちの一人なのだろう。

ドストエフスキは『悪霊』において、この「心の破損」を「心の広さ」と関係づける。

スタヴローギンの「心の破損」は、彼が他人の鼻をもって引きまわしたり、耳に噛み付いたりする奇怪な振舞いに及んだという事実によって立証されるわけではない。この事実が示すのは、医師たちが診断したように、彼が精神錯乱の状態にあり、「健全な理性と意志」を欠いていたということだけである。心や本性が壊れているというのは、「社会の約束や節度」を無視することとは違う。問題は医学的診断では捉えきれなかったところ、つまり、「健全な理性と意志」を保持しながら、それにもかかわらず、何かが根本的に欠落しているところにある⁴⁾。その＜何か＞は『悪霊』では、「道徳」ではなく、「心の広さ великодушие」という言葉・概念によって示されている。心が破損している、あるいは本性がこわれているのは、この「心の広さ」が完全に欠落している状態にあることを意味する。

「心の広さ」は『悪霊』を理解するためには欠かせない言葉である。小説の中では「心の広さ」をめぐってさまざまな声が交錯する。たとえば、スタヴローギンによれば、キリーロフやダーシャは「心の広さ」をもった人間である。リーザはスタヴローギンのことを「心の広い」人間だと信じ込んでいる。シャートフは、ヴィルギンスカヤが出産を仕切ってくれたことで、あさはかにも、彼女の仲間のニヒリストたちもみな、ほんとうは「心が広い」のではないか、人間も捨てたものではないなと思う。自由主義者のステパンは自分が「心の広さ」をもった人間であることを誇り、また他人からそう思われたいと願っている。彼はニヒリストの息子ピョートルと

も、「心の広さ」を通じて和解したがつている。だがその息子ピョートルは、「心の広さ」などは薬にたくもないと思っているし、ドストエフスキイの後のコメントによれば、なにより彼は、人々の「心の広さ」を利用する騙りである、等々。—「心の広さ」を実際に持たず、また自身も持たないと言明しているのは、登場人物の中でスタヴローギンただ一人であった。

великодушные (心の広さ) とは、великий (偉大な、大きな) と душа (魂、心) から作られた合成語で、他の人のために私的な利害を犠牲にすること、忍耐をも意味として含みこんでいる。そのニュアンスはさまざま。たとえばゴーゴリは、「心の広い великодушный」という形容詞を「博愛心に富む человеколюбивый」という語と並べ、類似の意味で使っている⁵⁾ (『友人との往復書簡抜萃』)。また彼は「自己の利益までも損なっても」行う行為を「騎士道的で心が広い」ものと考えていた⁶⁾。『悪霊』では、リーザがまさにスタヴローギンの行動を騎士道的なものと捉え、その行動を「心の広さ」の証ととる。ドストエフスキイも、ニュアンス含みでこの言葉を理解している。たとえば彼は犠牲的な精神に関して、こう述べている。

「誰にも強制されない」真の自己犠牲とは「個性の最高の発達」のしるしであり、意志の「最高の自由」のしるしである⁷⁾ (『冬に記す夏の印象』) と。このような「自己犠牲」を可能にするのが「心の広さ」であった。「心の広さ」を持たない者は自身の欲望を満たすだけで、誰をも愛せない。「心の広さ」とは、自己に捕らわれず、自己よりも他人のことを優先的に考えることのできる能力であり、この能力があつてはじめて人は人をゆるすことができるのである。「心の広さ」に関しては『作家の日記』の中にも次のような用例がある。—「理想主義者も、現実主義者も、ただ彼らが誠実で、心が広ければ、本質は同じ人類への愛であり、その対象は同じ人間であつて、ただ対象の形式が違っているだけだ⁸⁾」。

「心の広さ」という語のもつ概念的価値を肯定的なものと否定的なものに分け、それぞれプラス価値、マイナス価値と呼ぶとすれば、ドストエフスキイはもちろん、たいていの人間はプラスの価値を信じているわけだが、スタヴローギンの場合は必ずしもそうではない。これは「心の広さ」だけに限ったことではないのだけれども、彼は二つの相反する価値の一方を絶

対的に肯定すべきものとして選びきれないでいる。

スタヴローギンは「この上なく理性的な人」である。語り手（記録者）によれば、彼の怒りですら「理性的」だというのだから、徹底している。しかしそこが怖いところだ。「無限の自由」の必要性から論を起こしながら、行き着くところは「無限の専制主義」しかない論を結んで平然としているシガリョーフは、論理一辺倒のスタヴローギンのパロディだ。たとえ絶望に逢着しようとも、真理は動かしがたいのだとシガリョーフは言うが、そのような真理はいったい誰のためのものなのか。感情に惑わされず、理性だけを信頼して完璧に自己をコントロールできるのは、人間的なものを失っていることの裏返しである。人には誰でも大切なもの、聖なるものがある。自分が大切なことはもちろんだが、自分の意思とは関係なく自分以上に大切なもの、かけがえのないものに逢着してしまう、―それが本来、生というものではないか。ところが、自分を含め、スタヴローギンには捨て去ることができないものなど何もない。だから彼はガガーノフとの決闘においても、『その一発』（プーシキン）の伯爵のように、大胆に自他の命を弄ぶことができるのである。伯爵はその後、結婚して＜自分より大切な人間が出来てしまうと、銃口を向けられて平然としていられなくなったが、スタヴローギンには、そんな人間は現れない。

スタヴローギンは世間一般から見れば、いわゆる勇敢な人間、強者である。彼には怖いものがまったくない。しかしだからこそ、生きていることに実感がない。「重荷」がない、目的がない。強者であったとしても、そのことを誇りに思えないのだ。サドは「自然」であることに絶対的な価値を置き、さまざまな社会の「絆」は偏見と迷信にすぎぬと、それらを敢然と断ち切ってしまう⁹⁾が、スタヴローギンにはそれほどの開き直りもできない。のちのニーチェのように、キリスト教は弱者の^{ルサンチマン}怨恨で成り立っていると言い捨て、強者の哲学を模索することもできない。善悪の彼岸に立ち、すべての「偏見」から自由になることができると思っているながらも、一方でその自由を手に入れた瞬間、自分は破滅すると感じるのだ。スタヴローギンには『罪と罰』のスヴィドリガイロフ同様、強気な反面、こんな生き方では自分はだめになってしまうという意識がどこかにあって、それが彼

に「重荷」あるいは「偉業」を求めさせ、「心の広さ」を思慕させる。しかし同時にそれは、理性を惑わせるもの、＜狂気＞として拒否される。彼は熱くもなく、冷たくもなく、「なまぬるい」のである¹⁰⁾。たとえば、スタヴローギンは自殺直前の、ダーシャに宛てた手紙の中で次のように述べている。

「何事についても果てしなく議論することはできるが、私から流れ出たものは、なんらの心の広さもなく、なんらの力もない単なる否定でしかなかった。否定すら流れ出なかったのだ。何もかもがいつも底が浅く、生気がない。心の広いキリーロフは、イデーを持ちきれずに、ピストル自殺してしまった。しかし私は、彼の心が広がったのは、健全な理性がなかったためであると思う¹¹⁾」

一読すると、何か矛盾しているような錯覚に陥る。スタヴローギンは「心の広さ」がないために、空虚な生を過ごさなければならなかった。しかしそれは事実としてそうであると認めただけで、一見、自己卑下しているかのように見えるが、彼は自身に「心の広さ」のないことを心底悔やんでいるわけではない。なぜなら、彼からすれば、心の広さは「健全な理性」の喪失と引き換えでしか得られないのだから。スタヴローギンから見れば、キリーロフは、原因を追究するということに納まりきれず、理想実現のために冷静さを失い、自分を犠牲にしてしまったバカでもあるのだ。とはいえ、作者であるドストエフスキはキリーロフの「心の広さ」を別な面から見ている。たとえば創作ノートの中には次のような一節がある。「キリーロフのなかには、真理のためにすぐにでも自身を犠牲にするという民衆的イデーがある¹²⁾」。このすぐ後には、何をもって真理と見做すかが問題であるとの書き加えがあるのだけれども、少なくとも、ドストエフスキがキリーロフに、スタヴローギンにはない「民衆」との繋がりを見ていたことに違いはない。

リプーチンによると、キリーロフも「健全な理性」の信者で、ヨーロッパに健全な理性を取り戻すためには、1億以上の人間の首が必要だと主張

していたことがあるという。首の話はどうやらリプーチン自身の創作であるようで、キリーロフ自身は（少なくとも今は）、なぜ人間があえて自殺しようとしなのか、その原因を追究しているだけであるが、いずれにせよ、彼は彼なりに「健全な理性」を信奉していたことは疑いない。「最終的なよき目的」のために大量殺戮を是とする「健全な理性」はキリーロフというよりも、ニヒリストであるピョートルのものであるが、スタヴローギンはと言えば、基本的にはピョートルの考え方には賛成しながらも、大量殺戮に関しては彼の中の貴族的な精神、「ちゃんとした人間」が抵抗する。ただ、希望をもち、理想の未来図を描こうとしているピョートルたちのがむしゃらな情熱、その真剣な姿を目の当たりにすると、おもわずたじろいでしまう。ただ驚きはすぐさま、しらけた気持ちに変わってしまうのだが。スタヴローギンは、ピョートルたちの秘密結社の会の規約を作成したりして会に関与しながらも、彼らとは距離を置いていた。嫌悪の情を抱きながらピョートルたちのことを羨み、彼らを「悪意をもって」眺めていた。「なまぬるい」彼は何事にも徹底できない。

このなまぬるさは、空虚さと呼び込む。スタヴローギンは空虚さから抜け出す抜け道を探すが、見つからないまま、そのうちに生きてゆく意味もあいまいになってくる。もちろんそうすると、死んでゆく意味もあいまいなわけで、だからこそ彼は、「視界とイデーを狭める」スイスの山の中で陰気な余生を送ろうとしていたのである。ただ孤独はわびしい。ともに暮らそうとマリヤ・レビヤートキナやリーザに声をかけ、あるいは二人が死ぬと、すぐさまダーシャを誘うのもその「わびしさ(=退屈さ)」からである。愛する人が必要だったわけではない。彼には、ただいっしょにいる相手が必要だっただけで、それも絶対必要というわけではなかった。

結局、スタヴローギンの心は壊れたまま、修復されることはなかった。

ただ検閲のため削除を余儀なくされた「スタヴローギンの告白」の章を読むと、ドストエフスキイには、少なくともその章を書いていた頃には、＜罪＞の告白を通してスタヴローギンの＜心＞を再生させようとする計画があったことがわかる。残された原稿によれば、スタヴローギンはチホン神父から、ある長老のもとで修道士として時間をかけて修行するように勧

められた。ここで神父がスタヴローギンに求めているのは「大いなる犠牲」によるあがないである。ドストエフスキイはかつて『白痴』の執筆中に、『偉大な罪人の生涯』と題する長編を構想したことがあるが、もしもスタヴローギンがチホンの勧めを受け入れることになるのなら、『悪霊』はまさにスタヴローギンという「偉大な罪人の」物語になっていたかもしれない。しかし、実際にはそうはならなかった。それは検閲のためというより、おそらくはスタヴローギンの側に問題があるのだろう¹³⁾。残された原稿から、スタヴローギンの改心が失敗することをチホンが予感していることがわかる（「偉大なる一步を踏み出す前に、〔告白文書の〕公表をただもう避けようと、あなたは出口を求めて新たな犯罪にとびつくだろう¹⁴⁾」。「呪わしい心理学者め！」、これがチホンの庵室を去る時のスタヴローギンの捨てぜりふであった¹⁵⁾。

2.

スタヴローギンは高度なヨーロッパ的教養を身につけた人間であるが、その知性を育てた「ヨーロッパ」は、ドストエフスキイの考えでは、その知性ゆえに全面的な没落の前夜にあった。「道徳的なものの基礎」を根底から震撼させられ、ヨーロッパは「普遍的なものすべて、絶対的なものすべて」を失い、まさにいま崩壊しようとしていると、彼は語る¹⁶⁾。

ドストエフスキイの認識では、ヨーロッパの没落とスタヴローギンの心の崩壊とはパラレルである。スタヴローギンの言う「健全な理性」とは、言い換えれば、まさにヨーロッパ的知性のことであるが、この知性がどうやら、スタヴローギンの道徳的基礎を掘り崩してしまっただろう。ただ、話はややこしいが、ヨーロッパがこのような危機的事態にあることはスタヴローギン自身も知っている（彼はラスコーリニコフやスヴィドリガイロフ同様、すべてを「知っている」のだ！）。「これまで理性が善悪を規定しえたことなど一度もなかったし、たとえ近似的にも善悪を区別しえたことすらない。反対に、恥ずかしくもまたあわれにも、理性は善悪をいつも混同してきた。科学にいたっては、拳骨で解決してきた¹⁷⁾」、一ドストエフスキイ自身の言葉と取り違えそうであるが、これは、シャートフが伝える

- ・スタヴローギンの言葉である。彼はすべてを承知しながら、何も解決できない。善が美しく、悪は醜いという善悪の差異の感覚は磨滅してゆく。信仰が必要だということを知ったとしても、論理の力で信仰が突然湧き出るわけでもない。神を「兎」、信仰を「兎のソース」になぞらえ、「兎のソースを作るには兎が要るが、ただし、肝心の兎がない」とそらとぼけて嗤っている。「健全な理性」はすべてを知っても、ただ嗤っているだけなのだ。

「健全な理性」を持つスタヴローギンから見れば、「心の広い」人間は理性をもたぬ、知的レベルの低い人間である。ヴィルギンスキイ家の集まりに参加した者たちのことを、「陰気臭い鈍物ども」と呼んでいることからわかるように、彼は、自分が高度な知性をもった人間であることを誇り、いつも人々をはるかな高みから見下ろしていた。いや、それでは言葉が足りない。「貴族の坊ちゃん」として甘やかされて育った彼には、自分が人より一段高いところにいることがもうあたりまえになって、意識すらすることはない。それはもう歩き方にまでしみわたっている。彼は狭い道でも、その真ん中をどうどうと歩くが、そのおかげで同道する人間はちょこまか歩かねばならず、知らないうちに、歩道の外へ放り出されてしまうこともある。

人に助けを求めることなど、貴族のお坊ちゃんには屈辱の極みだ。というより、助けを求めるという発想すらスタヴローギンの頭には浮かんだことがない。それなのに彼はダーシャに、スイスに同行しないかと誘いをかける。「心の広い」人間の「心の広さ」をあたりまえのごとく当てにしているのだ。

「愛する友よ、わたしが見抜いたとおりのやさしい、心の広い人よ！ おそらくあなたはわたしにたくさんの愛を与え、あなたのその美しい心から麗しきものをわたしに注ぎ込み、まさにそうすることで、最終的にわたしの前に目的を指し示してあげようと夢見ているのではないだろうか。いや、用心なすったほうがいい。わたしの愛はわたしと同じく底が浅く、あなたは不幸である〔不幸になるだろう〕¹⁸⁾」。

スタヴローギンはこれより前に、いっしょにこの町を出て行こうと、マリヤ・レビヤートキナにもリーザにも提案をしている（マリヤの場合は行き先も同じだった）。何もダーシャが特別というわけではないのだ。誘い方もヘンである。愛しているから誘うのではないのだ。スタヴローギンに言わせれば、自分がダーシャを誘うのは、彼女が以前、彼の「看護婦」になるとみずから希望したからで、しかもその時、彼女は自分が必要になった時には必ず連絡してくれるようにと約束させた。だから自分は、約束を果たしただけなのだ。しかし、この誘いにもし、ダーシャが応じれば、彼女は不幸になるという。なぜなら彼自身には、ダーシャの献身を感謝して受け入れるだけの「心の広さ」（＝非理性）がないからだ。結局は来ないほうがあなたにとってはいいのだが、そう書きながらも、彼は「卑劣にも」彼女を呼び、彼女を待っている。—このもってまわったやり口にはまったく苛々させるものがある。愛しているなら誘う、愛していないなら誘わないと、どうして決断できないのかと思うが、自分を騙したくない、誠実でありたいということなのだろう。ただ、この誠実さは「限界のある」、エゴイスティックな誠実さである。この点ではスタヴローギンとピョートルは変わるところがない。

ピョートルは平気で人をだます騙りであるが、自分の行動は「自分には矛盾しない」と述べた。誠実さとはまったく縁のないように見える卑劣な男ですら、どうやら自分では誠実だと、真剣に思っているのだ。たとえば、酔っ払った母親が、自分を家に連れて返ろうとするちっちゃな子どもをひどい言葉で罵っているのを見ると、ピョートルも人並みに、かわいそうに思うのだという。「ぼくらの世の中になったら、きっと治して見せますよ」と、彼は真顔でスタヴローギンに語っている¹⁹⁾。今いかに非道なことをしていようとも、その誠実さはすでに、来るべき遠い「美しい」未来によって保証されていると思い込んでいるらしい。もしも誰かが同じことをピョートルに言ったら、彼は、言葉の遊びでしかないと嗤うに違いない。スタヴローギンにしろ、ピョートルにしろ、結局は＜私だけは特別＞なのだ。私が人々の犠牲になるのはまっぴらごめんだが、私は人々の犠牲を受け入れる権利があると信じて疑わない。『冬に記す夏の印象』の中で、ドストエ

フスキイはヨーロッパ（西欧）の人間の本性の中にある「対立の精神」についてこんなことを書き記している。彼らは自身の「私」は、「私以外の一切のもの」とまったく同等、同価値のものであるとみなし、すべてを自主的に決定する権利をもつと考えている²⁰と。この意味では、スタヴローギンもピョートルも、完全にヨーロッパ人の本性を持っていることになる。

スタヴローギンの手紙に戻ろう。

「精神の腐敗―これこそスタヴローギンの（告白の）文体の公式である」とグロスマンはスタヴローギンの文体を評した²¹けれども、相手を踏みこむエゴイスティックな誠実さは、まさに精神が腐敗している、あるいは崩壊している証拠かもしれない。他人への誠実さはどうでもよい。スタヴローギンは、どこまでも自分自身への誠実さに執着する。そして、スタヴローギンのこの＜誠実さ＞を利用しようと冷血漢ピョートルが裏で立ち回ると、人がばたばたと死んでゆく。もしもスタヴローギンが自身の情欲に＜誠実に＞従わず、断固としてピョートルの誘惑をはねつけてさえいれば、マリヤ・レビャートキナもリーザも、命を失わずにすんだのだ。もちろん、彼はそのことを知っていたし、罪も認める。

「私は自分の人生についてあなた〔ダーシャ〕に多くを語った。しかし、すべてというわけではない。すべてを語ったわけではないのだ！ ついでに言うが、私は妻の死に良心の上で罪がある。その後あなたと会わなかったので、確認しておく。リザヴェータ・ニコラエヴナに対しても罪がある²²」

問題は罪の認め方だ。「ついでに言うが」、「確認しておく」、一まるで何か、さほど重要でない事務報告のような書き振りである。後悔や反省はこんなふうにするものではない。スタヴローギンが「良心の上」の「罪」をあえて告白するのは、人間の代表者である自分以外の誰かにこの＜報告＞を行うことが、自身を欺くことがなかったことの証拠になると考えているからである。どうみても高潔であるとは言いがたい（が、そのことすら彼は知っている）。

「私は自分が自殺しなければならないこと、卑劣な昆虫としてこの大地から掃き出されなければならないことを知っている。しかし、私は自殺を恐れている。というのも、心の広さを見せることが恐いからだ。私はそれが欺瞞になる、果てしなくつづいてきた欺瞞の中の最後の欺瞞になることを知っている。心の広さを演じるためだけに自分を欺いてみても何になるだろう²³⁾」

「心の広さ」は、社会ではやさしさと同じく美点であり、肯定の力を呼び起こすことのできる倫理的な原動力でもあると認められている。だから世間から見れば、「心の広さ」のない自分は、「卑劣な昆虫」に等しい。しかし世間から見て「健全な理性」の指示がいかに「卑劣に」みえようとも、「私」は世間の評価に心を動かされることはない。「健全な理性」とはスタヴローギンが絶対に手放せないこの「私」そのものなのである。

引用文の中で、「心の広さ」が「欺瞞」と対置されている点に注意したい。かつてドストエフスキイはこう書き記したことがある（「1864年のノート」）。「キリストの訓えのごとく、自身を愛するように隣人を愛することは不可能である。地上の個の法則が縛る。『私』が邪魔をする²⁴⁾」。とはいえ、肉化された理想としてのキリストが現れたあとは、「自然（＝本性）」にさからってそこまで行き着かなければならない、とドストエフスキイは続けるわけだが、スタヴローギンはそのような理想の追求そのものが欺瞞であると考えている。彼には「私」の壁がどうしても乗り越えられない。というよりむしろ、彼はその壁を乗り越えたくはないのだ。

3.

にもかかわらず、誰もがスタヴローギンに惹きつけられる。なぜだろうか。

スタヴローギンは、ピョートルの言うように、一面から見れば、「ろくでもない、色狂いの、ひねくれた貴族のお坊ちゃん」にすぎない²⁵⁾が、もう一面から見れば、デーモンのように魅力的で、人を熱狂させ、燃え上がらせるすばらしい人間である。彼がすばらしいのは、人々が自分たちでくス

タヴローギン>を創りあげるからだ。スタヴローギンは<スタヴローギン>のための素材になる。それは、『死せる魂』のチーチョコフがN市の人々の間で、さまざまな像を創りだしたのと似ている。チーチョコフが<チーチョコフ>になるのは何より、その特徴のなさ、死んだ農奴を買いあさるという奇妙な行動によるところが大きい。スタヴローギンの場合は、知的で誇りが高く、何ものも恐れないという彼自身の性格が第一に挙げられるだろう。スタヴローギンは高名な作家と居合せても、まったく、なんの努力もせずに、彼を自然と無視できる。死を恐れない。自分の死だけではなく、他人の死も平気で受け入れる。<神>を演じることができるこのような素材であるからこそ、たとえばピョートルは彼を「イワン皇子」になぞらえ、民衆支配のための偶像に祭り上げることを思いついた。

キリーロフとシャートフはスタヴローギンの知性に魅了された。自然あるいは旧い神に対して人間の尊厳を主張した人神論と、ロシア・メシアニズムを根底にした国民神論、このスタヴローギンが語った二つの思想はそれぞれ、人類のために尽くそうという思いに燃えていたにもかかわらず、意に反して挫折し意気消沈していたキリーロフとシャートフの導きの糸となっていた。

女性たちはその優雅さと尊大さをそなえたスタヴローギンの美男子ぶりにうっとりとなり、そこにありもしない「心の広さ」を読みとった。たとえば、リーザ・ドロズドワのケースはその典型であろう。

リーザは大笑いしたり故意に無作法なまねをしたりして、スタヴローギンをみんなの前で侮辱した。しかし彼は怒りもせず、まるで侮辱など感じていないかのように、平然と受け答えをする。その態度が彼女の目には何か騎士道的なもの、「心の広さ」の証と映った。さらにリーザは、自分をヒロインとするロマンチックなストーリーを作る。自分が避けられているのも彼が結婚しているからで、彼は逃げ回ること、無分別な娘を守ってくれたんだと。リーザは彼の「心の広さ」を十分に評価しているが、一方で、その「心の広さ」がどうしても我慢できない²⁶⁾。リーザは、たとえ一瞬でもいいから、「心の広さ」を忘れ、一心不乱に、盲目的に自分を愛してほしかったのである。だから彼女は恋人のマヴリーキイを捨て、<情熱に燃え

上がる>スタヴローギンと狂おしい一夜を過ごすために、彼のもとへ一人で乗り込んできた。

一方、スタヴローギンからすれば、どれもこれも迷惑な誤解でしかない。ピョートルの偶像には彼はなれない。自分が「イワン皇子」になって、ピョートルと二人でロシアを支配するなんて、スタヴローギンに言わせれば、「狂気の沙汰」である。「ちゃんとした人間」としては、そんなばかげた妄想を受け入れるわけにはいかない。

キリーロフとシャートフに与えた二つのまったく異なる思想は、スタヴローギンにとっては、こんなふうにも考えられるという抽象的な議論の「試み」でしかなかった。そのことは、二人がほぼ同時期にそれぞれの思想をあてがわれていることからわかる。何も彼は二人を唆そうとしているわけではなかった。ただその時思いついた<おもしろい>考えを誰かに語ってみたかっただけなのだ。最後に彼が思いついてキリーロフに語ったのは、どんなに滑稽で醜悪な悪事のかぎりをつくそうとも、ズドンと一発、こめかみに弾を撃ち込めば、すべてはきれいさっぱり終わるという虚無的な思想であった²⁷⁾。人神論、国民神論、そしてこの虚無思想と、一人の人間が考えたにしては、まるで一貫性がない。スタヴローギンにとっては、思想は所詮、知的ゲーム以上のものではなかったのだろう。

スタヴローギンの意志の力は絶大で、たとえば彼は自身の虚弱な体を意志の力で強靱な体に作り変えることもできた。しかし、その絶大な力を善なるもののためには使えない。肯定と否定、いずれの方向にも使えない。なぜなら善をなしたいという思いも悪をなしたいという思いもありはしても、どちらも「底が浅い」からだ。淫蕩も「試み」だが、彼は「淫蕩を好まないし、欲しもしなかった」。いっさいを否定する「同志」たちともいっしょになれない。彼らの希望はうらやましいが、それも、とてつもなくうらやましいとは思っていないのである。彼は誰とも何ものも「分かちもてなかった」。ぬるいのである。「底が浅い」ので、すべてにおいて<不十分 недо~>なのである。冷たくも熱くもない²⁸⁾。冷たければ「悪意」や「嗤い」をもってニヒリストたちの運動に参画できたかもしれないが、それも

かなわない。なまぬるいのはどうしようもない。そしてそのぬるさはここでは、「ちゃんとした人間」の「習慣」をもっていることと同義である。

リーザもスタヴローギンを誤解している。

スタヴローギンを動かしていたのは情欲と「健全な理性」であり、「心の広さ」などではなかった。自分を「広い心」の持ち主と取り違えられることに、スタヴローギン自身はうんざりしている。かといってもはや「広い心」をよそおうこともできない。なによりそのような生き方は「欺瞞」である。この「欺瞞」を逃れるために、彼は誠実にリーザにすべてを告白してしまおうとしたが叶わず、結局、リーザは、スタヴローギンが妻を亡き者にしてしまったのは、彼女への＜思い＞が原因だというロマンチックな幻想を新たに作る。その結果、スタヴローギンは、罪の意識に苛まれた彼女を暴走させ、死なせてしまうことになる。

中途半端なのはダーシャに対してもそうで、スタヴローギンは自分から誘ったくせに、その返事を待つこともなく、あるいはこう言ってよければ、自由に、何ものにも縛られることなく、首を吊って死んでしまう。「ぼくは自分の心にだれを呼び入れようとは思わないし、だれも必要とも感じていません、ぼく一人でやっていけるんです²⁹⁾」—これは「スタヴローギンの告白」の章で述べられた言葉だが、他人の介入を許さない、まさに孤高を愛する性格を語って余りある。純粋な「私」を守り通すことさえできれば、それで十分なのだ。当人は、誠実な「健全な理性」で死を選択したというつもりなのだが、実際のところは生命力の衰退もあるのだろう。『罪と罰』のスヴィドリガイロフは、生きたいという思いは、非知性的で愚かな自己保存本能であると考え、それに縛られることない自分は自由な人間なのだと自負していた。死後に残されたスヴィドリガイロフの手帳には、「健全な理性をもって死ぬのだから、自分が死んだことで誰も責めないように」と記されてあった。同じように、「誰も責めないように。わたし自ら〔の決断〕だ (Я сам)」と書かれたメモを残して、スタヴローギンは首を吊った。「他人に助けを乞うよりは、地獄の責苦を受けても、彼自身であることを欲する」とはキルケゴールのいう「絶望」という病の一つであるが、キルケゴールによれば、それは、絶望してもあくまで自己自身であろうとする「傲

慢な」絶望である³⁰⁾。スタヴローギンの場合は、絶望までいかない（недо～）浅い「絶望」のようなものと言った方がいいのかもしれないが。

スタヴローギンの首吊りのための紐には、一面にべっとり石鹸が塗られていた。「すべては計画的なものであり、意識は最後の瞬間まで保たれていたことを物語っていた³¹⁾」。ダーシャのことを思う「心の広さ」はなかった。最後まで傲慢であった。彼は最後まで「私」の＜自由＞にこだわり、「健全な理性」と心中したのである。

キリーロフとは違い、スタヴローギンは「心の広さ」に惑わされることのない「健全な理性」をどこまでも誇りに思っている。しかし、彼は理性を失わないのではなく、「けっして失うことができない」のである。「健全な理性」のおかげで、彼は何事にもめりこめない。常に意識し、意識してしまうとなにやらもうそ臭くなる。深い自身の感情から「対象」をつくり、それを自分の前に置き、それに跪拝し、すぐに冷笑する、そういう能力がゲルツェンには最高度に発達していたとドストエフスキイは語っている³²⁾が、これはそのまま、スタヴローギンの能力でもある。スタヴローギンは信じているものを信じないとキリーロフは言うが、これはスタヴローギンが自動反省機械であったことを意味している。ロシアにいても他のどの場所にいても「すべてはよそ事だ」。スタヴローギンには何も強く憎めない、何も強く愛せない。「理性」のおかげで憎悪できない、愛せないというのはスヴィドリガイロフと同じだ。

とてつもない期待を抱かせるが、まったくその期待にそえない空虚な人間、—これがスタヴローギンの特徴である。

4.

スタヴローギンが「健全な理性」に支えられた高度な知性の持ち主、なにかんづくヨーロッパ的（あるいは西欧的）な知性の持ち主であることはこれまでも言及してきた。ヨーロッパ的ということは裏を返せば、ロシア的でない、ロシアの土壌から切り離されているということである。そのことをドストエフスキイはスタヴローギンの言語を通して明確に示している。先に引用したダーシャへの手紙からも分かることだが、なにより、彼はロ

シア語の初歩的な文法もマスターしていないのだ。たとえば「去年に в прошлом году」と書けずに、「去年の прошлого года」と書く（「～年に」という年を表す用法と、「～月…日に」のように日付を表す場合の用法を混同しているのである）。語り手（記録者）は言う。この手紙は、「そのすべてのヨーロッパ的教養にもかかわらず、ロシア語の文法を完全には学びえなかった貴族のお坊っちゃん」の文章である³³⁾と。このアンバランスは彼の知性のいびつさを示している。つまり、彼が「健全」と信じる「理性」は健全ではなかったし、偏向した「理性」から捉えられた「心の広さ」も理解を誤っているという疑いが出てくるのである。

奇妙なロシア語を使うのは、スタヴローギンだけではない。シャートフもキリーロフも、さらにはリーザやピョートルの言葉遣いもどこかヘンである。たとえばシャートフはマリイに、自分は町で製本所を開くつもりなのだが、そのことについてどう思うかと聞かれて、「我々のところじゃ本は読まれないし、それに本だってまったくない。彼は製本なんかしない」と答えた。そしてマリイに「彼」って誰かと訊かれると、その「彼 он」とは「ここの読者やここの住民一般」を指すのだと説明する。あなたは文法を知らないのかと、マリイがびっくりするのももつともだ³⁴⁾。これはしかし文法を知らないというのではなく、なんでも抽象化、普遍化する一種の癖なのだろう。

観念の世界に入りびたっているキリーロフは、自分はお産の手伝いができないという事実ですら、うまく伝えることができない。―「悪いけど、ぼくはお産ができなくてね。いや、ぼくがお産できないのじゃなくて、お産をさせるのができないのか・・・でなければ・・・いや、どうもうまく言えない³⁵⁾」。スタヴローギンから赤ん坊のことを尋ねられると―「三日前。赤ん坊がいて、病人が寝てます。毎晩わんわん泣きます、腹です。母親は眠っている、婆さんが連れてくる。ぼくがまりで。ハンブルグのまりです。投げたりキャッチするためにハンブルグで買いました、背中を強くします。女の子です³⁶⁾」。

あるいは外国生活が長かったせいかもしれない、― そう受けとられるのを避けるために、ドストエフスキイはわざわざ、そうではない、外国生活

の前からずっとこんなふうに話していたのだと、キリーロフに答えさせている。

彼らがヘンな言葉を使うその原因は、現実の生活を重要視していないということがまず、挙げられる。観念にばかり目がいって、生活そのものはどうでもいい。卑俗な現実の生活は彼らにとっては、高尚なイデーのための素材を提供してくるだけの価値しかない、と考えているのだ。実際、抽象的な論議ならなれたもので、彼らはみな「書物ふうに」流暢に話すことができるのだ。

あと、文法的な間違いとなると、その原因はおそらく、子どもの頃の教育にまで遡ることができる。根は深いのである。

ドストエフスキイは 1877 年の『作家の日記』の中で、母国語教育がまだ不十分なうちに早期に外国語を学ぶことの弊害を指摘して、こう述べている。「人間というものは、自分のもって生まれた言葉、つまり自分の属している国民の言葉でなければ、ほんとうに駆使できないという自然の秘密がある³⁷⁾」。ロシア人でもフランス語が駆使できるようになることはもちろん可能だが、それは、生涯のそもそものはじめから、フランス人になってしまうという条件付きの話である。人は、自分自身の本来の言語をもたなかったら、「浅薄なできそこないの理念 недоконченные идейки」と「一本調子な判断」しかもてない「国際的な半端者」になる³⁸⁾。

ふりかえってスタヴローギンを見ると、彼もどうやら、母国語教育をきちんと受けていなかったようだ。彼の周囲にはプーシキンの乳母のような、ロシアの昔話を語ってくれる人はいなかった。フランス語に関してはフランス人の家庭教師をつけていたと思われるが、ロシア語に関してはいいかげんで、どうやらフランス語を挟まなければ満足に話もできないステパン・トロフィーモヴィチが一手に引き受けていたようである。ステパンは当時、ワルワラ夫人の信頼が厚く、8 歳から 15 歳ぐらいまで、スタヴローギンの「学習や精神的発達」は、全面的に彼に任せられていた。ステパンは、自身の子どもっぽさのおかげで、壁を作ることなくスタヴローギン少年の心の中に親友として入り込むことができた。その影響力は絶大であったろう。

リーザやシャートフもスタヴローギン同様、子どもの頃、ステパン・トロフィモヴィチに教えられて育った。彼らはいわばついでに教えられていたわけで、その影響はスタヴローギン家の御曹司が受けたものほど大きなものではないだろう。しかしそれも比較の問題で、たとえばシャートフは、自分はワルワラ夫人の農奴として生まれたにもかかわらず、生涯、貴族のお坊ちゃんであることから逃れられなかったと告白している。キリーロフはどうだろう。キリーロフの幼少時代については言及がないが、彼が自殺寸前に記した遺書に、悪態としてとはいえ、「ロシアの貴族にして世界市民」とフランス語で署名したのは興味深い。これはドストエフスキイがゲルツェンにかぶせた称号である。ドストエフスキイによると、ゲルツェンは、生まれながらの「亡命者」で、「貴族階級・旦那衆 барство」の産物であった³⁹⁾。

母国語教育の問題は、ロシアにおけるヨーロッパの思想の受け入れの問題とも関係する。ロシアではヨーロッパ経由の思想、イデーがありがたがられ、思想マニア、イデー・マニアともいうべき<教養人>が街にあふれていた。たとえば『悪霊』には、こんな記述がある。ピョートルはペテルブルグへ行く汽車の中で、地主の息子の若い青年から誘われて「エララーシュ」(トランプ遊びの一種)をすることになったが、青年がその仲間の一人としてピョートルに紹介したベレストという男は、エララーシュ狂の「きわめて滑稽な大佐」であるが、「ちゃんとした人間」の一人で、しかも「イデーさえもっている」⁴⁰⁾。「イデー」は青年たちの間では、まるで流行のアクセサリーのようなものと見做されているのだ。ドストエフスキイに言わせれば、ロシアは200年の間に受け入れてきたヨーロッパの思想によって視野を広めはしたが、結局のところ、背負い込んできた一群の思想は、他人の言葉で考えられた浅薄なものである。たとえロシア語を使って表現されていても、所詮はロシアの「土壌」から生まれたものではない、他人の思想である。「感情のきれっぱしや、半わかりの недопонятные 思想、他人の結論、他人の習慣、ことに言葉、言葉、言葉」、— それはもちろん、もつともヨーロッパ的な、自由主義的な言葉であるには相違ないが、ロシア人にとっては、単なる「言葉のカオス」にすぎない⁴¹⁾。自由主義者がや

っているようなやり方で、ロシア人をヨーロッパ人に改造するのは、ロシア人を無人格化し、真の墮落に陥れることとなる⁴²⁾。

この墮落がいかなるものであるか、ドストエフスキイは、「自由主義で通用していた無意味なひやかし」により、主として教育された 20 代の半ばにいたった者の末路を次のように記している。「自分の才知を天才と思い込んだのは当然である。道徳的自己抑制もなしに成長した人間であってみれば、それこそ、途方もない自尊心が現れるのは、当然の話である⁴³⁾」。

ステパン・トロフィーモヴィチという「自由主義者」を教育係にして育ったスタヴローギンもまた、同じように、自分の才知を天才だと思い込んでいたのだろう。

ステパンは何より「自由」と「寛容(=心の広さ)」という「偉大な思想」を奉じていた。彼は自分たちの偉大な思想は「俗っぽい」街頭に引き出され、まったく違ったものになってしまったと嘆いてみせる。たとえば自由といっても、ヴィルギンスカヤ夫人のように、夫とは別に、気ままに愛人を作る「自由」を彼は主張していたわけではなかった。このようにはきちがえられた「自由」を嘆く彼の思いはよくわかる。彼はもっと高遠な、魂の自由というようなものを想定していたに違いない。しかし、その自由の守護神であるはずのステパンは 25 年間、ワルワーラ夫人のもとでのうのうと寄食生活を送り、時々「擬似コレラ」になって気恥ずかしさを押し隠しながらも、結局は賭博の金まで夫人に負担させていた。それだけではない。賭博の借金を返済するために、自身の農奴(フェージカ)を売り飛ばしさえしたことがあるのだ。彼にとって最後に家出を決行し、病に倒れるその日まで、「自由」や「心の広さ」とは何より、酒の肴になる「言葉」にすぎなかった(家出決行後の変貌に関しては後述する)。

ステパンはスタヴローギン少年に何を教えたのか。語り手は、ステパンが少年を「親友」扱いにし、傷つけられた自分の感情を涙ながらに訴えたこと、また、少年の心の奥底の琴線をかき鳴らして、「聖なる憂愁の最初の漠とした感覚」を呼び起こしたと書き記しているが、スタヴローギン少年はどうやら愚痴や不満ばかりを一方的に聞かされて育ち、この世に生きる楽しさを学びとれなかったのではないか。聖なるものについても語られた

形跡はない。たしかに偉大なる神についても話してくれたことがあったと、リーザは語っているが、それは、「ただ自分の中においてのみ自己を意識する存在としての神」だと当人は言う⁴⁴⁾。これは後の言葉だが、もしも自分が民衆に福音書を口頭で説いて聞かせれば、「この書物の誤りを正すこともできる」と彼は豪語していた。

「自由主義者」、「理想主義者」であればもちろん、自由や心の広さを教えてはいたろう。では具体的に、たとえばステパンは「心の広さ」を少年にどう教えたのだろうか。それは、現在のステパンの言動からある程度は推察できる。

ステパンはシャートフから、民衆を知らず、愛してもいない 1840 年代の知識人の典型だ、いまわしい無神論者だ、くずの無関心派だと、強く弾劾された時でも、平然とこう返していた。「シャートフ、こうした楽しい口論のあとでは、我々はなかよくすべきではないですか⁴⁵⁾」。そう言いながら、ステパンは「心やさしく *благодарно*」手を差しのべる。シャートフに対するこのステパンの言葉には、彼の考えている「心の広さ」がどのようなものであったのかが、はっきりと示されている。理想の旗の下、相手の非を咎めず、許すこと。とはいえ実際は、ステパンはただ、「心の広さ」を隠れ蓑にして自分の自尊心が傷つかないように言い繕っているだけなのだ。言葉、言葉、言葉……。

「言葉」だけだという批判の矢は、ステパンを攻撃するシャートフにも返ってくる。「楽しい口論」のあとは、「もちろん」、すぐに酒が運ばれ、ステパン氏が、かつてに適当な名目をつけて、乾杯の音頭をとるのだが、「繊細な神経を持つ」シャートフは気恥ずかしく思いながらも、その酒宴の場に居つづける。「生きた現実の敵」、「自立を恐れる時代遅れの自由主義者」を見捨てたと豪語するシャートフだが、＜楽しい＞議論のための議論からはどうしても逃れることができないのだ。彼の誠実さは疑えないが、それはあくまで＜頭で考えられた＞誠実さであった。自分はヨーロッパ人化してしまって、もう純粋なロシア人にはなれないからスラブ派になった。正しいと信じ、神を宣伝してはいるけれども、自分じゃ神を信じられない、等々、— 信じるべきものを信じられないシャートフの言動は、常に引き裂

かれている。

ステパンは息子ピョートルの領地を管理していたが、森林の伐採権を勝手に売り払ったりして、その価値を下げていた。息子から領地を売りたいとの申し出があった時はうろたえはしたが、領地の最高価格である1万5千ルーブルをぼんと出せば、えもいわれぬ「美しい情景」になると考え、ワルワーラ夫人から金を出させようとした。ステパンはワルワーラ夫人に説く。もしも金をいさぎよく出せば、「二人〔ステパンと息子〕の『イデー』にも、一種独特の、高潔な色合いが加わることをほのめかした。そうなれば、新時代の軽薄な、社会主義かぶれした青年たちに比べて、父親たちの世代、総じて旧時代の人たちがどんな、無欲な、心の広い人間であるかを見せつけることにもなるだろう⁴⁶⁾」。また、「他人の後始末のために」ダーシャと強制的に結婚させられそうになって、屈従の思いを味わわなければならなかった時も、この「心の広さ」に頼ろうとした。彼は記録者（語り手）に言う。「永遠にここから姿を消すだけの道徳的な力を持ち合わせていないなどと思うのか？ いやステパン・ヴェルホーヴェンスキイが、専制主義を心の広さでやっつけるのは、これが初めてじゃない……どこかの堀の下で飢え死にするくらいの心の広さはあるんだということを見せてやる⁴⁷⁾」。彼にとって「心の広さ」はすべてのものごとを穏便に解決する魔法のようなものであった。ステパンはこの「心の広さ」をもって、トランプに負けて売り飛ばした農奴のフェージカにも謝るつもりであった、等々。— もうこれで十分だろう。このような調子でステパンは「親友」の少年スタヴローギンに、「心の広さ」の大切さを訴えると同時に、その大切な「心の広さ」がいかに欺瞞に充ちみちたものであるかを無意識のうちに伝えていたのだ。

ステパンの息子ピョートルもまた、父の「心の広さ」が眉唾物であることを知っていた。ずっと伯母のもとで育てられ、彼が父親と会ったのは生まれた時と、大学の受験準備にはげんでいた時の二度しかないというのだから、「心の広さ」も何もないだろう。ピョートルにとっては、ステパンの「心の広さ」だけでなく、だれのどんな精緻な理論も「美的暇つぶし」であり、だれのどんな美しいイデーも「単なる言葉の遊戯」にすぎなかった。

ドストエフスキイは1873年の『作家の日記』で、こんなことを言っている。ピョートルは「ぼくは騙りで、社会主義者じゃない」と言うが、実際、ピョートルたちは「白痴」や「狂信者」ではない。彼らはきわめて狡猾な騙りで、人間の魂、ことに青年の魂の「寛大な〔心の広さの〕方面」を研究しつくして、それを「楽器のごとくもてあそぶのである⁴⁸⁾」。理想に燃える「広い心」を「楽器のごとくもてあそぶ」のはピョートルたちだけではない、ステパンもそうなのだ。いやこの場合、ある意味で、ステパンのほうが罪が深いのかもしれない。なぜなら、彼は青年ならぬ少年の魂の「寛大さ〔心の広さ〕」をもてあそび、少年の心に燃え立つはずであった理想の火を永遠に消し去ってしまったのだから。

5.

キリーロフは特別である。彼はスタヴローギン言うように、たしかに「心が広い」。

幼い少女とまり遊びをするキリーロフの姿は、終日子どもと遊んであきない、心やさしい良寛和尚を彷彿させさえする。彼自身が本来、子どもの心をもっているのだ。リプーチンはステパン氏たちに向けて、キリーロフは最終的な目的のためには全般的破壊あるのみという思想を奉じていると紹介する（おそらくかつてアメリカに渡る前にそのようなことを言ったことがあったのだろう）。それを受けてキリーロフはステパン氏から、鉄橋を作る者が破壊の原理の信奉者なんて、それでよく鉄橋建設の注文が来ますねとかからかわれるのだが、その時の彼の顔には、してやられたという陽気な、「まったく子どものような表情」が浮かんだ。語り手はその表情を、「非常に彼に似つかわしいものに思えた」と記している。「偏執狂」のキリーロフは、自身にイデーを与えてくれたスタヴローギンのことを感謝し、信頼している。スタヴローギンと話している時の目には、「何かしらおちついた、それでいていかにも善良そうな、ひとなつこい感情が表れていた⁴⁹⁾」。おそらくこんな感情を自然と出せる人物は『悪霊』の登場人物の中では、キリーロフを除けば、シャートフぐらいだろう。

キリーロフは、一方でピストル自殺を決意しているくせに、子どもと遊

ぶし、脱獄囚のフェージカに料理を作ってやったり、シャートフの頼みを聞いて世話を申し出たりする。子どもは好きか、生は好きかとスタヴローギンに聞かれると、子どもも生も両方とも好きだと答えた。「ピストル自殺を決意していても？」と問いただされると、「生は生、あれはあれ Жизнью, а то особю⁵⁰⁾」だと言う。この生とイデーがく別々だ>と考えるところに、キリーロフの思想の危うさがある。自殺を決意しているにもかかわらず、おそろしく健康を気にし、体操さえしているのは、きちんと自殺するために身体を鍛える必要があるからではない。あれはあれ、これはこれなのだ。「イデー」が彼を「食いつぶした」とピョートルは言い、キリーロフはそうに言われることを誇りに思っているようだが、実のところ、自身で意識できない非合理的なものがイデーに抵抗しているところにこそ、彼の本来の姿があるのである。「もしも…もしもあなたが、あのおぞましい幻想をあきらめ、あの無神論的なうわごとを捨て去ることができたら…あなたはどんな人間になってるんだろうなあ、キリーロフ！⁵¹⁾」とシャートフが言うのももっともなことである。

「偏執狂」のキリーロフは、自身のイデーに関わらないものは「どうでもいい」と切り捨てる。彼の知性はまったく日常の言葉、あるいは言葉の使い方を忘れかけている。ふつうの会話はすでに見たように、不完全な短文か、あるいは断片的な単語の羅列だ。言葉が流暢に出ないというだけではない。言いたいことが論理的にまとまっていない。まるでロシア語を習い始めたばかりで片言しか話せない外国人の子どもが、意を伝えようと懸命に話しているかのようなようだ。彼にとっては日常の言葉を使うことはそれほど慣れない、難しい仕事なのである。

しかし、自身のイデーに関することとなるととたんに、傲岸な態度になり、彼の言葉の選び方も厳格になる。実際、奇妙に思われるかもしれないが、『悪霊』の数多い登場人物の中で、キリーロフほど言葉を大切にしている者はいないのである。

たとえばラスコーリニコフもこだわった「卑劣漢」という言葉。キリーロフはピョートルに、自分の含め、すべての人間は「卑劣漢」だと言う。ピョートルは、どうせみんな同じで、頭のいい奴とバカがいるだけで、も

しみんなが卑劣漢なら、卑劣漢でない人間はいない。卑劣漢なのか卑劣漢でないのか、そんなものは言葉だけの問題だと返す。すると、キリーロフはこう言った。「ぼくは一生涯、これが言葉だけであってはならないと欲してきた。ずっと、そうあってはならないと欲しつづけてきたから、生きてきてこれだ。ぼくはいまでも毎日、言葉だけではないことを欲している⁵²⁾」。

<私は欲する> ― この思いはスタヴローギンよりもはるかに強烈である。この強烈な願望が、彼を自身のイデーの実現へと突き動かす。彼は神の不在と自身の神であることを証明するために、「我意 *своеволие*」を主張する義務があると考えている。しかし、我意を主張するというのなら、何も自分を殺さず、他人を殺してもいいはずではないか。「自分があなたの立場であれば、他人を殺しますね」。このピョートルの言葉に対しては、「わたしは、おまえじゃない」、他人を殺すのは「我意」の最低点であり、わたしは最高点を「欲して」自分を殺すと、キリーロフは答えた。ピョートルはこれを聞いて、「考えたものさ(=「自分の頭で行き着いたんだな」)と憎々しげにつぶやくが、他人を殺すか自分を殺すかの選択は<健全な>「理性(=頭)」で考えたものではない。それはひたすら「卑劣漢」でありたくないと「欲しつづけた」結果の選択であり、キリーロフの「心の広さ」に由来するものである。

キリーロフは死後どうなるかという恐怖は、すべての人間に共通するものだと考えているらしい。人は「死」の恐怖に縛られて自由でなくなってしまう。死なないのは、死を恐れるのは、「生を愛しているからだ」と記録者(語り手)が言うと、それは「卑劣だ」とキリーロフは語気強く返す。彼によれば、誰も生を愛しているものなどいない。生の謳歌などというミーチャ(『カラマーゾフの兄弟』)のような人間は、彼に言わせれば、ありえない(自身の身に照らして「知性」が判断するかぎり)。彼によれば、生は痛みと恐怖を代償にして与えられているが、人間がもしも最高の自由を望むならば、痛みと恐怖に打ち勝ち、自分を殺す「勇気」を持たなければならない。最終的に行き着く先は「勇気」なのである。

キリーロフはしかし、「生は生」と切り捨てたその「生」から最後のぎり

ぎりの抵抗を受ける。覚悟の自殺であるはずが、彼は「生」から突き上げられ、決行の直前には、吼えたけりながら、すさまじい形相でピョートルに飛び掛ってきたり、壁際の戸棚と戸棚の間のくぼみに直立不動の姿で隠れたり、奇声をあげたり、あるいはピョートルの指に思い切り噛みつきたりと、まるで狂気にとりつかれたかのような行動をとってしまう。ヴィノグラードフはこうした行動が、ヴィクトル・ユゴーの「死刑囚」(『死刑囚最後の日』)が最後に見る夢と類似していると指摘している⁵³⁾が、キリーロフはまさに、むりやり死に追いやられる死刑囚の恐怖を味わったのである。石鹼をべったり塗った紐で首を吊ったスタヴローギンとはまったく違った死に方であった。生に対する無意識的な愛情の有無が二人の死に方を分けたのである。スタヴローギンは「健全な理性」の導くまま、冷静に死を迎えたが、キリーロフの＜健全な心＞は最後の最後まで死に抵抗し続けた。

キリーロフは「勇気」の意味、抵抗する力の意味を取り違えたのだ。言い換えれば、「犠牲的精神」の使い道を間違えたのである。

イエスはキリーロフにとって人類の最高の「奇蹟」であった。しかしその、イエスも、キリーロフによれば、「自然の法則」に勝てなかった(このあたりはイッポリート(『白痴』)に似る)。「自然の法則」は、イエスにさえ憐れみをかけず、自身の生み出した奇蹟さえいつくしむことなく、イエスを「虚偽」の中に生きさせ、「虚偽」の中に死なせた。「したがって」惑星全体が「虚偽」の中にあると、キリーロフは結論する⁵⁴⁾。そこでキリーロフは、「我意」を貫き通すことで自ら神になり、キリストを無意味に葬った自然に歯向かって、人類のために立ちあがる、—そこに彼は自身の「真理」を見出したのであるが、その真理そのものが間違っていたとドストエフスキイは見做すのだ。ドストエフスキイによれば、いかに崇高なイデーであると思えても、具体的な身近な人間を考慮しないイデー、隣人愛を否定するようなイデーは根本的に間違っている。

のちの小説『おかしな男の夢』では、現実に今泣いている一人のかわいそうな少女を救うことが、人類の救済と同じ重みをもっていた。一人の少女への憐れみが、「おかしな男」に理想の世界を体験させた。いかに心が広

くても、その「心の広さ」は、人間一般ではなく、具体的な人間を救おうとする願望に支えられていなければ、結局は何ものももたらさないのである。さらに言えば、自分が犠牲となって人類を救ってやるのだという傲慢な意識が、キリーロフの病んだ頭から離れない。彼は、自らを犠牲とする「民衆的イデー」をもちながら、「知性」が破損していたために、広い心の使い道を誤ったのだ。

この点、家出以後のステパン・トロフィーモヴィチは、すぐに病に倒れてしまったけれど、そのみじめな状況ゆえに、かつての傲慢さを逃れることができた。彼はこれまでとは違って、真剣に息子たちのことを憂いはじめる。だからこそ彼は『悪霊』という小説のもっとも大きな主題を語る資格を得たのである。

病人から出た悪霊がイエスの許しを得て豚に入り、崖から湖に飛び込み、みんな溺れてしまったという福音書のガダラの豚の一節を聞き、ステパンはロシアとの比較を行う。自分たちは何世紀にももの間に積もりたまった不浄、汚らしいもの、悪霊の取り憑いた豚であり、「そして私は、ひょっとすれば、その先頭に行く者かもしれない⁵⁵⁾」。みんなが溺れ死んでしまったあと、一人の癒えた男が残る、それが浄化されたロシアである。このようにステパンは考えた。ドストエフスキイからいえば、ロシアにおけるヨーロッパ化の悪弊を「悪霊」として<彼ら>の中に凝縮してみせたということになるだろう。そしてその諸悪の根源をステパンは具現していると言ってもよい。しかし同時に、悪の根源であったこの「永遠にからっぽな人」から希望の光が射し込んでくるのだ。

ステパンはすでに述べたとおり、ワルワーラ夫人に寄生している口先だけのやくざな「自由主義者」であった。そのことはいくら強調しても足りないが、生涯の最後の最後には、彼はこれまで言葉だけであった自身の「自由」を得るためにほんとうに家を出た。今後二度とわたしの家の敷居をまたいでくれるなというワルワーラ夫人からの絶交の言葉があったとはいえ、また軟弱で、家を出ても道行く女にすがったり、例によって大言壮語したりしたけれども、それでも、たとえちっぽけなものであったにせよ、彼は、「心の広さ」が彼自身の中にもあったことを証明して見せた。このことは

銘記すべきことである。ドストエフスキイは、ドン・キホーテにも似るこのステパンという滑稽な人物を通して、埃をかぶっていた、多くの者が持つことを恥ずかしがっている「理想主義」を救おうとしたのである。

のちに『作家の日記』の中で、「40年代の理想主義の典型」として『悪霊』のステパンに触れ、彼はこう言っている。「私はステパン・トロフィーモヴィチを愛し、深く尊敬している⁵⁶⁾」と。なぜ深く尊敬するのか、その理由にはドストエフスキイは言及していないが、思うにそれは、ステパンが最後に見せた本物の「心の広さ」に関係している。雨の降る中、たった一人、家を出、足の赴くまま街道を歩き、そして病に倒れた。病に倒れ、ようやくステパンは自分は生涯、嘘ばかりついてきたことに気づく。そしてこれまで自身も、彼の教え子のスタヴローギンも逃れられなかった「私」の呪縛から解き放たれる。

「自分よりも限りなく正しく、幸せなものが存在するとたえず考えるだけでもう私は、はかりしれない感動、一栄光— に充たされるのです。おお、私が何者であろうと、何をなそうと、どうでもいい！ 人間にとっては自分一人の幸せを知ることよりも、この世界のどこかに万人万物のための完全な、安らかな幸せが存在することを一瞬ごとに信じることのほうが、ずっと必要なんです……（…）どんなに愚かな人間にだって、せめて何か偉大なものがが必要です。ペトルーシャ……私はもう一度、彼らみんなと会いたい！ 彼らは知らない、知らないんです、自分たちの中にもまた同じ永遠の偉大なる思想があるのだということを⁵⁷⁾」

自分は「健全な理性」を持っている、だから自分こそが絶対に正しいのだと、スタヴローギンたちは考え、その傲慢な考えから抜けだすことはできなかった。ステパン自身も自分の正しさを確信し、尊大にかまえ、ピョートルたちを「月足らず」で、「感傷癖」に浸っているでそこないだとなつねに見下してきた。そして、その一方ではみみっちく、自分の「敵」が、ピョートルの罪を父親の感化のせいにしなないと気にかけていた。「それにしても、私はどうなるんだ⁵⁸⁾」、— 心配なのは結局、世間におけるあれや

これやの自分の評判だけだった。かつての彼は自分がどうなるかを知りたかった。それが、今や、自分のことどころではなくなってしまう。他人の幸せを信じる必要があると思うようになった。変わったのだ。彼は『悪霊』の登場人物の中で唯一、精神的に変わり得た人間である。「悪霊」の暗い世界の出口に突然、小さな光が点ったようだ。

ドストエフスキイはかつてこう書き記したことがある。「理想追求の法則を果たさなかった時、すなわち『私』を人々や、あるほかの生きもののために愛のうちに犠牲にしなかった時、人は苦悩を感じ、この状態を罪と呼ぶ⁵⁹⁾」のだと（「1864年のノート」）。「私」を離れ、「自分一人の幸せ」を離れ、ステパンは万人万物の幸せを信じ願う。彼の願いは抽象的なもので終わらない。彼は自身の息子ピョートルのことも心から気にかけている。

もちろん、すべては言葉だ。ステパンの語る言葉も所詮は、単なる言葉に過ぎない。しかしそのステパンの「心の広さ」を示す言葉を、蒸留し不純物を取り除いた「40年代の理想主義」が残しえた真実の言葉だと、ドストエフスキイは信じているのだ。そしてそのように信じることのできるドストエフスキイもまた、心の広い理想主義者であった。

注

- 1) Достоевский Ф.М. Полн. соб. соч. в 30 томах. Т.11. Л., 1974. 《Наука》 Стр.152. (以下、本全集は『ドストエフスキイ 30 卷全集』と略記する)。
- 2) 同上、第 10 卷、227 頁。
- 3) Карякин Ю. Достоевский и канун XXI века. М., 1989. 《Советский писатель》，Стр.376.
- 4) 「あなたはほんとうに、わたしが完全な正気の状態、人にとびかかってゆけると思っているのですか」というスタヴローギンの問いかけに、リプーチンが硬直して答えられないのは興味深い（『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 10 卷、44 頁）
- 5) Гоголь Н.В. Полн. соб. соч. в 30 томах. Т.8. М.-Л., 1952. АН СССР, Стр.411.
- 6) 同上、290 頁。ちなみに「心の広い」抱擁は、ゴーゴリが人間愛を語る時の重要なイメージである。
- 7) 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 5 卷、79 頁。
- 8) 同上、第 23 卷、70 頁。下線は筆者のもの。以下、同じ。傍点は原文イタリック。
- 9) 秋吉良人『サド— 切断と衝突の美学』（白水社、2007 年）を参照。『悪霊』の中ではシャートフが、幼い子どもを誘惑して墮落させていたという噂の真否をスタヴローギンに尋ねる時に、「サド侯爵」に言及する。
- 10) ドストエフスキイは、読者がこの「なまぬるさ」に思いを致すように、聖書売りの

ソフィアに、『ヨハネの黙示録』の中の「ラオデキアにある教会に宛てた手紙」の一節を読ませている（『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 10 巻、497 頁）。—「こんなふうにおまえがなまぬるく、熱くも冷たくもないから、私はおまえを口から吐き出す」。

- 11) 同上、514 頁。
- 12) 同上、第 11 巻、303 頁。
- 13) スタヴローギンは文書の公表後、人を避け、修道院に入れば、自身の「小心＝心の小ささ *малодушие*」を示すことになると思った。一挙に片をつけたいと望むスタヴローギンには、長い年月をかけるべきだというチホンの意はまるで伝わらない。
- 14) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 11 巻、30 頁。傍点は原文イタリック。
- 15) もちろん、残された「告白」の章の原稿を見るだけでは、ドストエフスキイの当時の考えはこうだと、断定はできない。「告白」のスタヴローギンは、「黄金時代」の夢を見ていること一つをとっても、決定稿のスタヴローギンのイメージにそぐわないところがある。おそらくベムの指摘するように、この「告白」を執筆した時期のドストエフスキイには、自身の「罪ある」主人公をどのように理解すべきか、迷いがあつたのだろう。См.: Бем А. Л. *Эволюция образа Ставровгина*. - В кн.: Достоевский Ф. *«Бесы»*: Антология русской критики, Сост., послесл., Л.И. Сараскиной. М., 1996. *«Согласие»*, Стр.659.
- 16) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 26 巻、167 頁。
- 17) 同上、第 10 巻、199 頁。
- 18) 同上、514 頁。
- 19) 同上、324-325 頁
- 20) 同上、第 5 巻、79 頁。ドストエフスキイによれば、だからスタヴローギンやピョートルには「同胞愛」が育たない。
- 21) Гроссман Л. *Стилистика Ставровгина*. - В кн.: Достоевский Ф. *«Бесы»*: Антология русской критики, Сост., послесл., Л.И. Сараскиной. Стр.610.
- 22) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 10 巻、513 頁。
- 23) 同上、514 頁。ここでの傍点は筆者のもの。
- 24) 同上、第 20 巻、172 頁。傍点は原文イタリック。
- 25) 同上、第 10 巻、326 頁。
- 26) 同上、400 頁を参照。
- 27) 虚無的な思想を、スタヴローギンは「相手の言うことを聞かず、自分の思想の糸をたぐ」るようにしながら語っている。米川正夫は、この時の対応は冷笑するようなスタヴローギンのいつもの態度とは違っているとし、これは「彼のニヒリズムが地球の限界を越えて、コスミックになったことを証明するもの」だと指摘している（『ドストエフスキイ研究』河出書房新社、1971 年、327 頁）。しかし、一方で、スタヴローギンは、自殺によって「心の広さ」を示すのを恐れているのだ。つまり、世間の人々の評判を気にしているのである。とても「コスミック」なニヒリズムとは言えそうもない。思うに、かつてシャートフやキリーロフに自身の思想を披瀝した時も、同じように「自分の思想の糸をたぐ」るように語ったのではないか。
- 28) 「スタヴローギンの告白」の章では、『黙示録』の「ラオデキアにある教会に宛てた手紙」の一部分を、チホンがスタヴローギンに読む。またこの章が削除されることになる、すでに述べたように（注 10）、同じ部分を今度はステパンが聖書売りに読んでもらうことになる。ドストエフスキイはこの言葉をどうにかして小説の中に響かせたかったのである。
- 29) 『ドストエフスキイ 30 巻全集』第 11 巻、12 頁。

- 30) 松浪信三郎・飯島宗享訳『絶望という病・現代の批判』白水社、2008年、111頁。
- 31) 『ドストエフスキイ 30 卷全集』第 10 卷、516 頁。
- 32) 同上、第 21 卷、9 頁。自身の考えを意識するとうそ臭くなり、信じられなくなる、
— この点でスタヴローギンとヴェルシーロフ（『未成年』）は共通する。 — 「実際ま
た、奇妙なことに、自分の信じている思想を展開しようとしたすと、話の終わり頃
にはほとんど必ずと言っていいほど、自分の話してきたことが自分で信じられなくなる
という結果になるのです」（同上、第 13 卷、179 頁）。
- 33) 同上、第 10 卷、513 頁。
- 34) 同上、441 頁を参照。
- 35) 同上、444 頁。
- 36) 同上、187 頁。
- 37) 同上、25 卷、132 頁。
- 38) 同上、141 頁参照。
- 39) 同上、第 21 卷、8-9 頁を参照。
- 40) 同上、第 10 卷、478-479 頁。
- 41) 同上、第 25 卷 68 頁。
- 42) 同上、455 頁を参照。
- 43) 同上、132 頁。
- 44) 同上、第 10 卷、33 頁。ステパンによれば、その神は、「下女」が信じているよう
な神ではない。彼は、自分はキリスト教徒ではなく、むしろ古代ギリシャ人のような
古代異教徒だと言う。
- 45) 同上、34 頁。
- 46) 同上、63 頁。
- 47) 同上、73 頁。
- 48) 同上、第 21 卷、129 頁。「寛大な方面」の原語は великодушная сторона である。
- 49) 同上、第 10 卷、189 頁。
- 50) 同上、188 頁。
- 51) 同上、436 頁。
- 52) 同上、469 頁。
- 53) Виноградов В. В. *Последний день приговоренного к смерти* — В кн.: Достоевский Ф. «Бесы»: Антология русской критики, Сост., послесл., Л.И. Сараскиной. Стр.532-534. 死刑囚の夢では嘔み付くなどの行動は老婆のものとなっているが、老婆の味わう恐怖は死刑囚の恐怖を投射したものであった。
- 54) 同上、471 頁。
- 55) 同上、499 頁
- 56) 同上、第 23 卷、64 頁。
- 57) 同上、第 10 卷、506 頁。
- 58) 同上、63 頁。
- 59) 同上、第 20 卷、172 頁。